

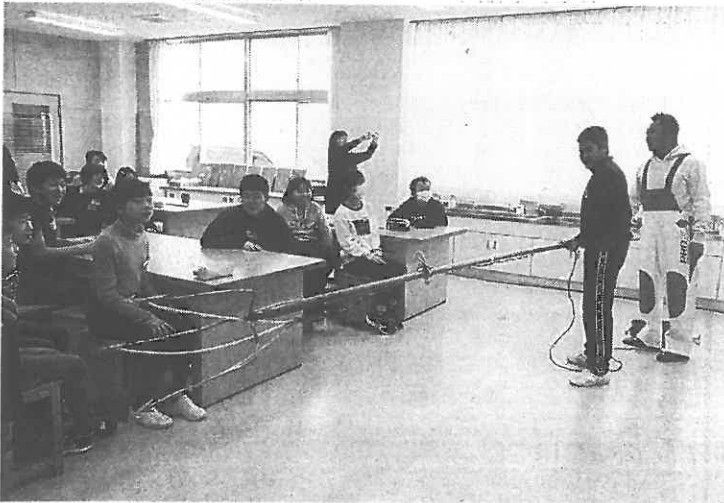
三陸新報

メカジキ漁の苦勞学ぶ

唐桑小で食育授業

気仙沼市立唐桑小学校(小松英紀校長)で25日、気仙沼の魚を学校給食に普及させる会(臼井壯太郎会長)による食育授業が行われた。5年生19人が地元メカジキ漁師の講話を聴いてメカジキ漁への理解を深めたほか、タブレット端末を使いながら気仙沼の漁業について学んだ。

メカジキの突きん棒漁を行う第38漁徳丸の漁労長・小野寺庄一さん(唐桑町崎浜)が講話。気仙沼から北海道にかけての漁場で日の出から日没までメカジキを追い、多い時で20匹も漁獲することや、大きいもので400キ、近いメカジキが取れることなどを説明した。その上で、突きん棒漁で使う実物の銚(もり)を子供たちに持たせ、激しく揺れる船の突き台の上で銚(もり)を構え、メカジキを狙うことなどを解説。銚は長さ5尺、重さ約7キもあり、持ち上げられない児童もいた。小野寺さんは船上で撮影したビデオを見せるなどしながら、漁の過酷さや、大物を漁獲した時の喜びなどを語った。



実物の銚を持ち上げながら漁の過酷さを実感

中村城斗君(11)は「銚が思っていたよりも重たくて漁の大変さを実感した。400キもあるメカジキがいることにも驚いた。メカジキはみそ焼きにして食べるのが大好き。過酷な思いをして取ってきてくれる漁師さんに、あらためて感謝したい」と話した。引き続き行われたタブレット端末による授業では、同会スタッフが講師を務め、児童一人一人が端末を操作しながら、三陸沖は暖流と寒流がぶつかる世界三大漁場であることなどを学んだ。